

『#三毒狩り（上）（下）』（東山 彰良著、2025 年）を kindle で読んでみた。著者は、台湾出身の日本の小説家。父親も、神話研究、散文、小説、詩などの分野で活躍し、台湾で著名な作家・文学者。大藪春彦賞（2009 年）；直木三十五賞（2015 年）；中央公論文芸賞（2016 年）；織田作之助賞（2017 年）；読売文学賞（2018 年）；渡辺淳一文学賞（2018 年）。

本作は、毛沢東時代の中国山東省の吹牛村を舞台に、養父母の愛情を受けて育った捨て子の佟雨龍を主人公にした物語である。共産党の青年幹部・田冲の若き日の侮辱に対する復讐により、雨龍は養父を殺され、彼の恋人であったはずの姉も幹部に貢がれる。雨龍は復讐を果たすも銃殺刑を受けて、地獄に送られる。

養父母殺害に対する復讐を遂げた後、鬼（グイ）となって地獄から現世に舞い戻った佟雨龍が、地獄から逃げ出した「食欲（鶏）」、「怒り（蛇）」、「愚かさ（豚）」の化身である三毒の退治の使命を閻魔大王より受ける（復讐相手である田冲が三毒の化身に憑りついていた）。物語は、雨龍が生きるために、そして「諦め」を悟るための冒険へと進んでいく。

地獄から現世に舞い戻るエピソードが振るっている。毛沢東が中国辺境で行った核実験の衝撃で、地獄から現世への扉が開いたからだというのだ。三毒退治の場面は、まるで神話の世界であるかのように、人間と鬼、鶏、蛇、豚がへちやめちやに暴れまわるのである。古今東西の地獄図の再現である。ここまでやると呆れるよりも感動ものである。

#### 古今東西の「地獄」イメージ

宗教や文化によって大きく異なる。共通していることは、「死後の罪の報い」、「恐怖による教化」、「人間の心の投影」として描かれてきたことだ。インド・中国・日本の仏教的地獄、西洋キリスト教の地獄、さらには文学や芸術における地獄像がそれぞれ独自の色彩を持っている。

#### インド・中国・日本の仏教的地獄

- ・インド起源：古代インドのバラモン教において、死者を裁く王ヤマが登場し、地獄は罪人の苦しみの場として位置づけられた。
- ・中国での展開：唐代には「十王信仰」が成立し、閻魔王を中心に死者を裁く体

系が整えられた。宋代以降は石刻や絵画で地獄の責め苦が細かく描かれる。

- ・日本への伝来：平安時代、源信の『往生要集』が六道輪廻を体系化し、地獄絵が盛んに制作された。炎や血を強調する恐怖の絵から、江戸期には庶民向けに素朴でユーモラスな地獄絵も登場した。

- ・地獄の種類：熱地獄と寒地獄に大別され、八大地獄とその細分化で合計 256 もの地獄があるとされる。

#### 西洋キリスト教の地獄

- ・聖書的イメージ：地獄は「永遠の火」、「硫黄の池」として描かれ、神に背いた者が永遠に苦しむ場。

- ・中世ヨーロッパ：ダンテ『神曲』では地獄が九層に分かれ、罪の種類ごとに罰が与えられる。これは後世の文学・美術に強い影響を与えた。

- ・芸術表現：ヒエロニムス・ボスやブリューゲルの絵画に見られる怪物や混沌の描写は、人間の恐怖と想像力を象徴している。

#### 文学・芸術における地獄

- ・日本文学：『今昔物語集』や『源氏物語』にも地獄の描写があり、立山地獄など山岳信仰と結びついた表現も見られる。

- ・落語・近代文学：桂米朝の『疑獄八景』や佐藤重紀『三毒狩り』のように、地獄は社会批判や人間の欲望を映す舞台として再解釈される。

- ・現代文化：地獄は恐怖だけでなく、ポップカルチャーや娯楽の中でユーモラスに描かれることも増えている。

本作の地獄は、単なる死後の世界ではなく、毛沢東の共産党社会（人間社会一般）の倫理・恐怖・想像力を映す鏡としたようにも思える。桂米朝一門の『地獄八景 亡者の戯れ』もその時代の世相を映しながら、恐怖と滑稽さが交錯する地獄像が描かれており、興味深い。視聴をお勧めする。

評価：★★★★★